

# 19 世紀アイルランド・ロマン派女性詩人による 児童の教育

19th-century Irish Romantic Female Poets and the Education of Children

太田 祐子

英語コミュニケーション学科非常勤講師

## 抄録：

1798 年英国によりアイルランドが併合された後も、アイルランドの女流詩人たちは、その詩作により児童、青少年をアイルランド独自に教育した様子が数多く試みられる。その内容は、英国の教育とは異なるアイルランド特有の児童・青少年へのメッセージをこめたものが多い。本論文では、児童教育の分野で名高いメアリー・レッドベター（Mary Leadbeater 1758-1826）及びアデレイド・オキーフ（Adelaide O'Keeffe 1776-1855?）らの作品を考察し、データベースを用いて解析した結果、当時の女流詩人がアイルランドに根強い教育の伝統を生かしながら、理想の社会を建設しようとしたことが明らかになった。

## Summary:

Following the annexation of Ireland by Britain in 1798, a significant number of Irish female poets endeavored to impart education to children and adolescents through their poetic compositions. These educational endeavors were distinctively Irish in nature, deviating from the conventional British pedagogical methods. The primary focus of this thesis is the examination of the works of eminent figures in the realm of children's education, namely Mary Leadbeater (1758-1826) and Adelaide O'Keeffe (1776-1855?). Utilizing a database for analysis, it was discerned that these female poets of the era strived to construct an ideal society, utilizing the tradition of education prevalent in Ireland. This finding underscores the pivotal role played by these poets in leveraging education as a tool for social construction within the Irish context.

キーワード: アイルランド、児童教育、メアリー・レッドベター、アデレイド・オキーフ

Key Words: Ireland, Children's education, Mary Leadbeater, Adelaide O'keeffe

## はじめに

これまでロマン主義時代のアイルランドの詩人の中で、トマス・ムーアやシドニー・オーエンソンはロマン派として文学的に評価されてきた。しかしその他の詩人たちについては「英国」文学のいわば周縁にあるものないしは英国文学に包含されて論じられ、彼らの詩の持つ独自性は看過されてきた。とりわけロマン主義時代のアイルランドの女性作家の全貌は論じられることは少なかったが、近年彼らの詩はスコットランド女性作家の詩同様脚光をあびるようになった。

2008 年作成のロマン主義時代のアイルランド女性詩人 50 人の詩約 1,900 作品を収めたデータベースで 1800 年から 1830 年に詩で多く取り上げた言葉の使用頻度を調べると表 1 のようになる。

(表 1) アイルランド・ロマン派女性詩人の言葉の使用頻度

Word	Number of words appeared in poetical works (1,829 works) of Irish Romantic women poets	
<b>A</b>	1801-1837	1768-1842
Ireland	47	70
Erin	60	76
Dublin	16	22
Hibernia	11	32
<b>B</b>		
shade	269	335
land	232	308
tree	115	147
water	89	112
river	56	74
<b>C</b>		
nation	69	100
England	46	68
Britain	24	52
country	125	167
<b>D</b>		
slave (s)	91	113
poor (poverty)	254	326
<b>E</b>		
child (children)	325	406

データベースは Behrendt Stephen C., et al, *Irish Women Poets of the Romantic Period*, Alexander Street Press を使用。

使用頻度の高い言葉をアイルランドや都市の名前（A）、自然（B）、英国について（C）、奴隷（D）、子供（E）のグループに分けると、子供（“children”）という言葉の使われた回数は彼女たちの詩の中で非常に多いことがわかる。データは単純な使用回数頻度ではあるが、「子供」という語の多用が見られることは、18世紀から19世紀のアイルランド文学を初めて包括的にまとめた論文集 *Cambridge History of Irish Literature* (2006) においてクレア・コノリー (Clare Connolly) は1800年から1830年の文学を概観し、“Advanced Romantic theories of education saw the development of a body of literature written especially for children. . . .” (425) と、ロマン主義時代の教育理論がアイルランドにおいても広まり、子供向けの文学がアイルランドで発展したと述べたことと関連性があると考えられる。

また、アイルランドの教育史家ディアドラ・ラフテリー (Deirdre Raftery) はその著書 *Female Education in Ireland 1700-1900* でアナ・バーボルド (Anna Barbauld) やサラ・トリマー (Sarah Trimmer) ら英国女性作家の教育書が19世紀初頭にダブリンで出版されて以来、アイルランドの児童の教育に多大な影響を与えたと述べている (16-18)。

更に前述のコノリーによれば、

Edgeworth, who ‘helped invent modern children’s fiction’, wrote rationalist tales based on hers and her father’s belief in the value of education in the home. Adelaide O’Keeffe (1776-c.1855) published poems as part of Ann and Jane Taylor’s Original Poems for Infant Minds (1804) , National Characters Exhibited in Forty Geographical Poems (1808) , . . . O’Keeffe was the daughter of the playwright and actor John O’Keeffe, . . . . Mary Leadbeater and Harriet Beaufort (Edgeworth’s step-niece) also published instructional books aimed at children. . . . (425; 下線部筆者)

特に児童教育の発展に大きく寄与したアイルランド人女性作家はアデレイド・オキーフ (Adelaide O’Keeffe)、Maria Edgeworth (マライア・エッジワース)、Mary Leadbeater (メアリー・レッドベーター) らであった。エッジワース一族の教育論については過去の研究も進み、啓蒙主義を取り入れた進取の教育論について論じられることは多いが、オキーフやレッドベーターについてはこれまであまり論じられることはなかった。そこで本論文では今まで論じられることの少なかった女性詩人オキーフと レッドベーターを取り上げ、1801年の英国によるアイルランド併合の後、アイルランド人である彼らが詩を制作する際にどのような考えを投影し、それが読まれることで、どのような理想の社会を目指していたのかについて論じ、教育という視点からロマン主義時代のアイルランド女性作家の理解を深めたい。

はじめにレッドベーターの作品における教育の特徴を、19世紀初頭の英国での教育観との関係をふまえながら考察し、最終的にアイルランド人であった彼らたちの独自性がどのようなものであったのかについて考察する。

## I. オキーフの詩と教育

オキーフは1776年アイルランドのダブリンに生まれた。劇作家であった父ジョン・オキーフ (John O'Keeffe) の仕事のため少女時代ロンドンに移り住んだ。父親はカトリック、母親はプロテスタントであった。父が視力を失い両親が離婚した後、オキーフは父と共に暮らす。ドネル・ルウェ (Donelle Ruwe) によれば、彼女は父親の脚本の制作の手伝いをする中で会話体の文章の技術を身につけ、詩作品においても、日々の生活の会話を巧に取り入れ、劇的な要素を数多くもうけた ("Adelaide")。オキーフの児童のための詩の作品集は全部で4つあるが、それらに見られる教育には大きく3つの特徴が挙げられる。

一つ目は自然における教育の重要性を描いている点である。それが顕著にみられるのはオキーフが初めて児童向けに書き、1804年から1805年にHarvey and Darton社に出版された児童向けの詩集『児童の心のための自作詩集』(*Original Poems for Infant Minds* 全2巻)である。この詩集は発行当初、作者は "By Several Young Persons" (「複数の若者」) とのみ記されておりオキーフの名前は記載されていないが、他にアン・テラーとジェイン・テラー (Ann, Jane Taylor) そしてテラー父子の詩などが収められている。この『児童の心のための自作詩集』は日常生活を題材に扱いながら、詩で子供に道徳を教える、初期の代表的な作品である。

The history of poetry published for children begins in 1804, with *Original Poems for Infant Minds*. Although attributed to "Several Young Persons," the authors were Jane (author of "Twinkle, twinkle, little star") and Ann Taylor and their brother Isaac. It was "the book that awoke the nurseries of England," claims children's book historian F. J. Harvey Darton. Although soaked in the traditions of nursery verse and religious moral verse, the volume recognized even in its title the beginning of a new genre: these were "original" poems composed in the early days of the children's book-publishing industry. (Zipes 1162)

ジャック・ザイプスも述べる様にオキーフらにより執筆された始めとする『児童の心のための自作詩集』は「創造的」("Original")な詩集であった。

この詩集の「目を使って」("The Use of Sight")では、以下のように主人公の一家の父親が、散歩をしてきた子供たちに何を学んだのかを尋ねる場面がある。

"WHAT, Charles return'd!" papa exclaim'd.  
 "How short your walk has been!  
 But Thomas--Julia--where are they?  
 Come, tell me what you've seen."

"So tedious, stupid, dull a walk!"

Said Charles, "I'll go no more; . . . .

.....

First look, papa, at this small branch,

Which on a tall oak grew,

And by its slimy berries white

The mistletoe we knew.

A bird all green, ran up a tree,

A woodpecker we call,

Who, with his strong bill, wounds the bark

To feed on insects small. . . . (O'Keeffe, "The Use of Sight" 1-6, 25-32)

怠け者とされる子供の一人チャールズは、散歩がいかに退屈だったかを告げる。しかしチャールズと対照的な子供のトマスとジュリアは、父親に自然の中で自らの視覚、嗅覚を通して知った動植物のすばらしさを報告し、自然の中に神の業を見ることができた彼らは父親から褒美を与えられる、というものである。人間の知覚から神の存在への理解に向かう姿勢は啓蒙主義的であるが、自然と教育は切り離せないものとなっている。

このような自然を重んじる教育観はオキーフの作品よりも約20年前の英国のユニテリアン作家バーボルドが児童向けに書いた散文『子供のための散文による讃美歌』(*Hymns in Prose for Children* 1781)における教育観と通底している。

CHILD of reason, whence comest thou? What has thine eye observed, and whither has thy foot been wandering?

I have been wandering along the meadows, in the thick grass; the cattle were feeding around me, or reposing in the cool shade; the corn sprung up in the furrows; the poppy and the harebell grew among the wheat; the fields were bright with summer, and glowing with beauty.

Didst thou see nothing more? Didst thou observe nothing beside? Return again, child of reason, for there are greater things than these. -God was among the fields; and didst thou not perceive him? his beauty was upon the meadows; his smile enlivened the sunshine. (*Hymns in Prose for Children*, Hymn VI, 37-39)

『子供のための散文による讃美歌』でオキーフの作品の登場人物と同名のチャールズは、母親に自然の中の散策で何を学んだのか、と尋ねられ、ありきたりの地方の光景を話すと、母親はもっと「理性」を使ってまわりの事象を観察し、その中に神を見るように諭す。英国のユニ

テリアンが行ったように、子供が理性を駆使しながら自然を観察し、自ら神についての理解を深める、という教育が宗派を超越し、アイルランド人作家でカトリックのオキーフへと受け継がれている様子がわかる。

当時の教育界にオキーフらの書いたこの『児童の心のための自作詩集』はどう評価されたのであろうか。オキーフと同時代の英国の代表的な児童教育者トリマーはその著書『教育の守護者』(*The Guardian of Education* 1802-6)の中で、以下のように

The sentiment in the poem, entitled “Old Age,” . . . is above little children. . . . “False Alarms” we could wish had been omitted. Few would think of playing such tricks as it describes, and it is better not put such things into children’s heads, for those who are mischievously inclined would most probably practice them. “The Child’s Monitor” is founded upon the belief of every one’s having a Guardian Angel. As this is a matter not clearly revealed in Scripture, (though believed by some of the first divines,) we think it is better not to give the idea to little children. (4: 79)

オキーフらの書いた『児童の心のための自作詩集』を批評し、表現されている「感情」が子供には強すぎるため不適當であると批判している。

だがオキーフは本を読む子供があたかもその場にいるような臨場感を持ち、自ら誠実さや勤勉の重要性を学ぶように工夫している。例えば、「偽りの警告」(“False Alarms”)では嘘つきのためにやけどをする怖い思いを描き、子供に読書体験的に道徳を教えている。

オキーフの二つ目の教育観の特徴は、子供自身がその知性を自主的に高めることの重要性を説いている点である。アイルランドは歴史的に見ても教育への国民の関心の深い国であり、オキーフの父も娘の教育に熱心であった。啓蒙主義思想に根差した人間の理性を重んじる傾向は、1808年出版の詩集第二作目『子供の心を高め、徳に向かわせるための自作詩集』(*Original Poems, Calculated to Improve the Mind of Youth, and Allure It to Virtue*)において記されている。子供がその道徳心を高めるように読書することが重要視されるが、読書はあくまでも子供の興味を引き出すために行われることが前提となっている。

MY pretty child I am your friend,  
And much to me you owe;  
'Till I to you some knowledge lend;  
How little do you know!  
I am a book for girls or boys  
To tell them this or that;  
I never din them with my noise,  
Or tease them with my chat.

.....

The diamond has a rugged coat,

And yet its lustres shine;

The brown pear's sweet call'd bergamot;

And sweet these words of mine.

Now shut me up, and put me by,

And rest your little brain;

And where I'm put I'll quiet lie,

Till you shall read again. ("The Book" in *Original Poems, Calculated* 1-8, 25-32)

上記の『子供の心を高め、徳に向かわせるための自作詩集』の「本」("The Book")では、大切な「本」は子供である「あなたが」(32)興味がわき「又読んでくれるまで」(32)放っておかれ、あくまでも子供の学ぶ意志が優先される。教育的工夫としても、子供が自分で口ずさみ歌いやすいようバラッド韻律の形式が用いられている。

このような子供の知性がより公平に育つため、オキーフは時には教える立場である大人はしばしば愚かなことも教えている。例えば「ずるがしこいネコ」("A Sly Puss")という詩では、猫、オウム、サルといった子供の喜びそうな動物を登場させる。

"O no," cries the parrot, as perch'd on a screen,

My lady, my lady, you're wrong;

For dipping in mugs, if the wit is so keen,

To pussy your praises belong.

This morning at breakfast your pussy he saw

"(He's now at his mimicking tricks)

Down into the cream-pot puss thrust her soft paw,

Her paw then so sweetly she licks." (O'keeffe, "A Sly Puss" in *Original Poems* 41-48)

中でもずるがしこいネコが毎日女主人の食べ物を盗むが、その飼い主である女主人がまんまと動物に騙されるどころか、そのずるい猫を溺愛してしまうという設定である。猫のずるさが見抜けたのは女主人ではなく、飼っているオウムである。大人の愚かさを客観的に描くという点は同時代の作者の作品には珍しい作品である。

3つ目の O'Keeffe の教育観の特徴は、子供に社会的問題への関心を持たせ、有機的世界観を育成しようと試みた点である。それは 1808 年に出版されたオキーフの『40 の地理的な詩に表れる世界の国々の特徴』(*National Characters Exhibited in Forty Geographical Poems*、)に明らかにされている。オキーフは当時の地理の知識を歴史学者ウィリアム・ガスリー (William

Guthrie 1708-70) の *A New Geographical, Historical, and Commercial Grammar* に求め、詩のタイトルが示すように世界 40 各国の子供を主人公として第一人称の独白形式の詩を書き、それぞれの国の土壌に根差した問題や生き方を提示している。

(表 2)

Part I: Europe		Part II: Asia
.....		<b>The Wild Arabian Boys</b>
The Polish Peasant	The Norway Hunter	The Persian Girls
The French Cottage Girl	The Danish Sailor	The Indian Shawl Weaver
The German Physician	The Swedish Miner's Wife	The Tartar Herdsman
The Swiss Soldier	The Russian Youth	The Chinese Servant Boy
The Spanish Mountaineer	The English Banker	The Japanese Servant Girl
Song	The Scotch Law Student	The Kamschatdale Fisherman
The Portuguese Gardener	<b>The Irish Officer</b>	America
The Greek Captain of a Ship	The Welch Curate	The Greenland Wife
The Iceland Guide	The Dutch Labourer	The Canadian Widow
The Lapland Boy		The Philadelphian Bookseller
The Moorish Pirate		The Mexican Cocoa Gardener
		<b>The Jamaica Slaves</b>
		The Brazilian Merchant
		Islanders
		The Otaheitan Youth
		The Molucca Maiden
		Africa
		The Gonaqua Hottentot Shepherd
		The Negro Kings
		The Abyssinian Child
		The Egyptian Nobleman

*National Characters* の目次により作成。(強調部筆者)

例えば、“Jamaica Slaves”（「ジャマイカの奴隷」）では奴隷の母親が茶碗を一個割ってしまったことで起こる悲劇が語られる。

I saw her seized, I saw her strip,  
 Her hands were bound, I saw the whip:  
 I flew upon the overseer,  
 He dash'd me to the ground,  
 He chain'd me to a log,  
 I heard the call—"Bring out your slaves to flog."  
 Wildly she threw her eyes around,



Trembling with shame and fear.

They dragg'd her far away,

I tore, I broke my chain—

But could I there remain?

O could I see the cart return

Upon her mangled bleeding body mourn—

O wretched dreadful day! ( “Jamaica Slaves” in *National Characters* 5-18)

母親は裸にされ死刑になる寸前、英国の奴隷解放が始まり、命を救われる設定になっている。  
また、オキーフが地理を教えながら最終的に目指した偏見のない、平和主義的思想は、アラビアの少年を主人公とする「荒々しいアラビアの少年たち」“Wild Arabian Boys”に顕著に表れている。

A welcome cool breeze, a grove of fine trees,

I'll pluck you a handful of dates.

At the foot of this rock come my camel and kneel,

And in its cool shade I'll partake of your meal;

How mutual is our obligation!

For each other provide

Thus sit side by side,

While in carnage are dyed

The *Turkish* and *Araby* nation. ( “Wild Arabian Boys” in *National Characters*, 45-53)

アラビアの野蛮な盗賊の少年が、飼い馬と果物を共に食べる、という体験を通して、自分以外の存在を尊ぶことを学び、やがて敵対するトルコの少年とも友情を結び、二人の少年が盗賊から足を洗ってトルコのスルタンにつかえ、砂漠の安全のため警備にあたるという争いの無い平和を意識した詩になっている。

オキーフの児童向けの詩には政治的な意味が含有されていることは、自伝的な旅を扱った子供向けの詩集『海岸地方への旅』(*A Trip to the Coast* 1819) の一篇「捕らわれた貝」(“The Captive Fish”) に明かである。幼い姉妹が海岸から、美しい貝を生きのまま持ち帰ろうとするが、その残酷さと自らの自己中心性に気づきあきらめる。

"I'll put them all into a box,

There they may die, or live:

There's no great harm in catching fish,

My live-stock to me give."

"No," said mamma, "you must not take  
Them home, as you expect;  
So leave them to enjoy their lives:  
Pray do what I direct.

The empty shell, tho' not so bright,  
More pleasure will impart:  
From wanton cruelty abstain,  
And have a tender heart.

Why should you take these helpless things,  
And doom them to starvation?  
Tho' small, they're yet the work of God.  
They're part of his creation. ("The Captive Fish" in *A Trip to the Coast* 36-51)

上記の“catching”(38)、“cruelty”(46)、“starvation”(49)は詩の中で多用されており、この詩は単なる子供向けの詩の枠を超え奴隷問題を意識したと考えられる。

当時の知識を最大限に利用して子供に地理を教えようとする教育は英国で19世紀に入り盛んになっていたが、奴隷制への反対詩や民族的な偏見のない理想的社会の建設を唱えている様子がわかる。

更に、オキーフのアイルランド人作家としての心情が一番端的に表れているのは『40の地理的な詩』の「アイルランドの将校」(“Irish Officer”)である。英仏戦争から帰還した将校は名誉は手にしたが、手足や視力そして祖国にいた婚約者をも失っている。

*Ireland!* thou beauteous velvet rock,  
On which no venom yet could live  
.....

Oh when a youth I took such pride  
Into the House of Parliament to glide,  
Debates to hear:  
A member hid me by his side,  
And archly smiling cried,  
"A future patriot I fear,

A GRATTAN he will grow."  
Tis now a Bank they say—well be it so.  
And in the Courts and Streets springs grass I'm told;  
Spirit is dead—its grave-stones we behold.

Old Trinity's grand College,  
Fam'd for virtue, learning, knowledge,  
Where had I enter'd, I had happier been.  
*Killarney!* now my soul takes fire!  
No spot on earth can equal thee.

.....

I come—give me a home,  
Grant me a tomb,  
There I'll buried be:  
My foster-brother PATRICK is my heir;  
Sweet Heaven, Oh take him to your care!  
He'll mourn for me. (“Irish Officer” in *National Characters* 32-22, 57-66, 73-83)

大人を主人公とするこの作品は、子供を主人公とする他の国についての作品とは一線を画す。ルウェが以下のように指摘するように、この将校が兵役経験のあるオキーフの父親に類似しているが(“Adelaide”)、この作品を通してオキーフは将校の子供時代の議会政治的にも学術・芸術的にも活力のある、アイルランドでの幸せな記憶と、悲惨な今とを比較することで、アイルランドの状況を憂いている。

以上のようにオキーフの詩は啓蒙的教育論を踏襲しつつ自然を重んじ、子供に大人を凌駕する視座を与える、というロマン主義的な要素も濃いものである。オキーフの詩は児童の徳育、知育教育を目指しながら、当時のアイルランドを含む英国の社会問題すなわち偏見、奴隷問題、人種の不平等などが強く提起されそれを解決するため、子供の偏見を正し、幅広い世界観を持たせようとする様子がわかる。また、「アイルランドの将校」の詩に表れていたように、アイルランドの国民の議論の能力や学術の衰退を嘆き、アイルランドの過去への理解を子供に深めようとする点がオキーフの詩における教育内容の特徴である。

## II. レッドベターの詩と教育

次にレッドベターの教育の特徴を考察する。オキーフとほぼ同時代の女性詩人レッドベターはダブリンから約50キロ南西のキルデア州バリトアに生まれた。レッドベターの祖父リ

チャード・シャクルトン (Richard Shackleton 1758-1826) は、エドモンド・バークを輩出したバリトアスクール (Ballitore School) の校長であった。クエーカー教徒である彼らは禁欲的生活や、社会的な問題の是正のために運動、例えば奴隷売買反対運動や、19 世紀前半の「大飢饉の際の社会運動」(“Quakers” in McCormack) が挙げられる。レッドベターは 1794 年子供向けの教本を執筆して以来約 30 年間の作家生活に入り、同時代のアイルランド女性詩人メレシナ・トレン (Melesina Trench) や、ジョージ・クラブとの交流があった。1808 年発行の『詩集』(*Poems*) はダブリンで発行された後、英国内でも販売され、巻頭の 8 ページにわたる購読者を分析すると全体約 500 名のうち特定できる者のうち約 90 パーセントがダブリン、ウォーターフォード、リメリック、コークなどに住むアイルランド人、また 10% が主にロンドン、マンチェスター、リバプール、ヨーク、カンバーランドなどの英国人であった。レッドベターの読者のアイルランド内外への広がりが見えてくる。

また、レッドベターの教育的特徴をオキーフの特徴と比較しながら考察すると、1 つ目の自然を重要視する姿勢に関しては、レッドベターもオキーフに共通する特徴を見出すことができる。レッドベターにとっての自然とは彼女の故郷キルデア州 (Kildare county) の村そのものであった。

That whether warring winds engage,  
Or ruthless human passions rage,  
A sacred refuge we may find,  
The temple of a quiet mind! (Leadbeater, “Farewell to England” in *Poems* 41-44)

例えば、上記「英国との別れ」(“Farewell to England”) の詩では、レッドベターの故郷の村バリトア (Ballitore) が「心の神殿」(44) であった。

また「ダブリンから戻って」(“Returning from Dublin”) では、

Now let me fondly rush once more  
To all thy charms, O BALLITORE!  
For whilst I wander in thy grove,  
Or while beside thy stream I rove,  
A sweet emotion fills my mind,  
Which in no other spot I find. (“Returning from Dublin” in *Poems* 30-35)

バリトアの森や川辺にいるときにのみ甘美な感情に満たされると書いており、都市ダブリンと自然に囲まれた故郷とを対比した。故郷の自然への感懐を歌い上げる点はロマン派の詩と共通する。

ここで注意すべきことは、レッドベターはその作品において、アイルランド人であってもダ

ブリンを中心に高まっていったナショナリストたちの動きには一線を画す姿勢を表していることである。レッドベターは故郷バリトアの年代記 (Leadbeater Papers) と言われる *Annals of Ballitore* (Leadbeater 死後 1862 年発行) を執筆しており、アイルランドで起こった 1798 年のアイルランドのナショナリストによる暴動でバリトアの知人も多くの被害を被ったことを憂えている (1: 211 – 41)。レッドベターの作品は国家というよりあくまでも故郷の自然を心の拠り所としてたたえる内容になっている。

また、オキーフの 2 つ目の特徴となっていた、理性を重要視する態度については、レッドベターも子供の頃から、知恵や知識を身につけることを重んじる教育を受けた。

SINCE then, daughter of my love,  
All such searches fruitless prove,  
Let us hear what Wisdom says;  
She can guide in pleasure's ways.  
Wisdom cries "Nor sensual joys,  
Nor ambition's glitt'ring toys,  
Nor false learning's swelling pride,  
Nor the wealth which misers hide,  
Solid happiness can bring;  
Since polluted is their spring.  
Let my humble vot'ries know,  
Whence those happy currents flow,  
Which through generations ran,  
Gladd'ning the pure heart of man." ("The Father to His Daughter" in *Poems* 37-50)

知性を重んじる教育姿勢は、レッドベターと交友関係にあった同時代のロマン派の女性詩人メレシーナ・トレンチ (Melesina Trench) の「母から一人娘の幼子に」 ("From a Mother to Her Infant and Only Daughter") にも見られるが、上記引用の詩「父から娘へ」 ("The Father to his Daughter") に表れているように、「知性の語ることに耳を傾けること」 (39) が重要であり、真の知性を育成することを重視する啓蒙主義的思想が見られる。

最後に、オキーフの教育の 3 つ目の特徴となっていた、子供に社会的問題への関心を持たせ、有機的世界観を育成しようと試みた点に関しては、レッドベターの作品にも顕著に表れている。『詩集』の中の、「物乞い」 ("The Beggar") では、当時の貧困などの社会問題を子供にも詩を通して教えようとする意図が見える。

YET I will not deny, when rebellion arose,  
That my sons took the field, the sad scene of my woes;

They fell:-their white bosoms were purpled with gore:-  
Oh pity my anguish, nor question me more.

Now far from that home where no comforts remain'd,  
My hapless old dame an asylum has gain'd;  
Where lonely her grief in sad solitude flows,  
While I bear her the tribute which pity bestows.

BUT soon shall our wants and our sorrows be o'er,  
These tears cease to stream, and those hearts throb no more!  
We pant for the moment which loosens our chain,  
And gives us to join our dear children again. (“The Beggar” in *Poems* 28-39)

ここで、レッドベターはバリトアに住む貧しい老夫婦の息子がアイルランド蜂起の際亡くなったこと、妻が施設に入り、夫はわずかばかりの自分の食べ物を分け与えるが、希望を失った老夫婦は死後息子たちに再会することのみが楽しみなことを描き、社会問題を提起する。

宗教的な独自性を維持するレッドベターはパークの深い影響を受け、奴隷制に反対する詩を書いているが、レッドベターの祖父が校長を務めた学校をパークが息子を伴って来訪した折のことを詩に書いている。

ADVENT'ROUS youths! such talents rare  
Hath prescient Heav'n to few assign'd:  
But all to imitate may dare  
The virtues of that gen'rous mind.

HERE let your just desires be found,  
The prize shall well the toil requite;  
'Tis only with such virtues crown'd  
Such splendid talents shine so bright.  
 (“On a Visit Paid to Ballitore by Edmund Burke and his Son” in *Poems* 49-56)

この「エドモンド・パークとその息子によるバリトアへの訪問について」 (“On a Visit Paid to Ballitore by Edmund Burke and his Son”) では、学校に通う生徒たちにパークの心の「寛大さ」(52)、「美德」(52) は万人が持てないほどすばらしいものであるが、理想として目指すよう促している。

更に、「平和よ」 “To Peace” という詩は、平和を希求することの必要性を訴えている。

NOT to the seaman tempest-tost,  
Who sits him down to weep,  
The tranquil calm more grateful spreads  
Upon the boiling deep:-

NOT to the trav'ler, faint and sad,  
Wand'ring by night forlorn,  
Through breaking clouds more radiant shines  
The golden light of morn:-

NOT to the sick and throbbing brain,  
With fever's rage opprest,  
More welcome is the soft return  
And honey-dew of rest:-

THAN o'er the mind, benighted, tost,  
And sore with sorrow's sting,  
When Peace her healing balsam pours,  
And spreads her shelt'ring wing.

THE world can nought like this bestow;  
No tongue the joy can tell:-  
Then will the favour'd mind revolt,  
Or e'er again rebel? ("To Peace" in *Poems* 17-36)

レッドバターは、アイルランド国内においても平和がないがしろにされ、国内の謀反による暴動が広がっていくことを危惧し、「この世のものはこれ（平和）ほどのものを与えることはできない」（33）、また「だれもその喜びを言葉で伝えることができない」（34）そして「（平和に）恵まれたものは反乱を起こしたり謀反を起こしたりするだろうか？」（35-36）と平和の重要性を説いている。

## まとめ

オキーフ、レッドバター両者は境遇や文学的活動の場に違いはあるものの、同じ教育を主眼とするその作品にはいくつかの共通点も見られた。作品には啓蒙主義の要素が含まれ、あくまでも子供の理性を伸ばすことを目的として書かれたが、ロマン主義的な要素として、自然を愛

し、自然そのものから学ぶ姿勢を教えようとしている。更に、社会的な問題への取り組み例えば偏見の是正、奴隷問題などを積極的に詩に取り組んでおり、子供に有機的な世界観を育もうとする意図が見られた。アイルランド・ロマン主義時代の女性作家について、メアリー・オダウド (Mary O'Dowd) は、彼女たちは「たいていアイルランドのナショナリスト運動の表舞台には立たず、その政治的見解を散文というよりむしろ詩を通して表現した」(12) と述べる。読者がたとえ子供であっても作者は政治性を持たせていることがわかる。

英国の統治下にあり、英国を非難することはなかったが女性作家たちがアイルランドの作家であることを証するかのように、オキーフの場合には過去のアイルランドの栄光を希求する態度を、またレッドベターの場合には首都ダブリンを中心に巻き起こるナショナリストたちとは一線を画しながらも、平和的なアイルランドの地方をもとに作られる理想の社会を希求する態度を発信した点が特徴的である。

(本論文は2015年第41回イギリス・ロマン派学会全国大会(奈良教育大学)で行った発表「アイルランド併合後のアイルランド・ロマン派女流詩人による児童の教育」の内容を加筆修正したものである。)

## 引用文献

- Barbauld, Anna. *Hymns in Prose for Children*. 1781, edited by Allison Lurie and Justin G. Schiller, Garland, 1977.
- Behrendt Stephen C., et al, editors. *Irish Women Poets of the Romantic Period*, 2006, Alexander Street Press, <https://www.proquest.com/iwprp/>.
- Connolly, Claire. "Irish Romanticism, 1800-1830." *Cambridge History of Irish Literature*, edited by Margaret Kelleher and Philip O'Leary, vol. 1, Cambridge UP, 2006, pp. 407-48.
- Guthrie, William and James Ferguson. *A New Geographical, Historical, and Commercial Grammar; and Present State of the Several Kingdoms of the World*. Rivington, 1812.
- Leadbeater, Mary. *Annals of Ballitore*. Bell, 1862, *Internet Archive*, [https://archive.org/details/dli.ministry.16130/E09320\\_The\\_Leadbeater\\_Papers\\_Vol\\_1/](https://archive.org/details/dli.ministry.16130/E09320_The_Leadbeater_Papers_Vol_1/).
- . Cottage *Dialogues Among the Irish Peasantry*. Johnson, 1811.
- . *Poems*. Dublin: Keene, 1808. *Irish Women Poets of the Romantic Period*, edited by Stephen C. Behrendt, et al, 2006, Alexander Street Press, <https://www.proquest.com/iwprp/>.
- McCormack, William J., editor. *The Blackwell Companion to Moderne Irish Culture*. Blackwell, 1999.
- O'Dowd, Mary. *A History of Women in Ireland, 1500-1800*. Longman, 2005.
- O'Keeffe, Adelaide. *National Characters Exhibited in Forty Geographical Poems*. Lymington, 1818.
- Behrendt Stephen C., et al. *Irish Women Poets of the Romantic Period*, edited by Stephen C. Behrendt, et al, 2006, Alexander Street Press, <https://www.proquest.com/iwprp/>.



- . *Original Poems, Calculated to Improve the Mind of Youth, and Allure It to Virtue*. Johnson, 1810, *Irish Women Poets of the Romantic Period*, edited by Stephen C. Behrendt, et al, 2006, Alexander Street Press, <https://www.proquest.com/iwprp/>.
- . *Original Poems, for Infant Minds*, Taylor, Jane, Ann Taylor, Isaac Taylor, Miss O'Keeffe (Adelaide) , and Bernard Barton. Vol. 2, Hall, 1854, *Internet Archive*, <https://archive.org/details/originalpoemsfor02tayl/page/n5/mode/2up>.
- . *A Trip to the Coast, or, Poems Descriptive of Various Interesting Objects on the Sea-Shore*. Darton, 1819, *Irish Women Poets of the Romantic Period*, edited by Stephen C. Behrendt, et al, 2006, Alexander Street Press, <https://www.proquest.com/iwprp/>.
- Raftery, Deirdre. "Industry, Piety and Servitude: Schooling for the Female Poor, 1700-1900." *Female Education in Ireland 1700-1900: Minerva or Madonna*, edited by Deirdre Raftery and Susan M. Parkes, Irish Academic P, 2007, pp. 5-32.
- Ruwe, Donelle. "Adelaide O'Keeffe." *Irish Women Poets of the Romantic Period*. Alexandria Street, 2006.
- Trench, Melesina. "From a Mother to Her Infant and Only Daughter." *Ellen: A Ballad, Founded On a Recent Fact, and other Poems*. Cruttwell, 1815, *Irish Women Poets of the Romantic Period*, edited by Stephen C. Behrendt, et al, 2006, Alexander Street Press, <https://www.proquest.com/iwprp/>.
- Trimmer, Sarah. *The Guardian of Education: A Periodical Work*. 1802-6, Thoemmes, 2002. 5 vols.
- Zipes, Jack. *The Norton Anthology of Children's Literature*. Norton, 2005.